



21 世紀における創世記の解釈

アーネスト・ルーカス

『創世記 1』の文脈では、『日』という言葉は文字通り 24 時間でしかありえない。「私は問うが、第一の日と第二の日と第三の日が、それらには朝と夕べがあったと言われているが、でも、それらが太陽も月も星もなしに、そして第一の日には天すらもなしに存在したというのが合理的な陳述だなどと、知性を持った人間のいったい誰が考えるだろうか？ 私は、誰もこれらが比喩的な表現であり、歴史に似せてある種の神秘を示しているのだということを疑わないだろうと思う」。

要旨

本論は、創世記の最初の数章は、科学的文書としてではなく古代ヘブライ人に向けられた象徴的物語として表現された神学的文書として読むべきであると示唆する。このようにして読まれれば、創世記の物語は今日のわれわれに深く関わる意味を持つ。近代科学の発見と矛盾するどころか、創世記はわれわれが人類やその他の被造物の益のために科学や技術の営みを進めるための枠組みを与えてくれるのである。

19世紀から20世紀初期にかけての近代主義の高まりはキリスト教神学のうちの2つの相矛盾する流れと結びついてきたが、その流れはどちらも聖書の解釈に影響を及ぼした。主流の流れは聖書のテキストをより批判的に分析し、聖書テキストを資料や著者や成立年代の点から「科学的に」扱うことを助長した。しかし、近代主義の高まりは、また、科学的知識が唯一信頼できる形の知識であるとする近代主義的前提から、聖書の諸文書をあたかもそれらが科学的知識を述べていると主張しているかのような解釈を促し、1920年代米国の創造説論が起こる一つの原因となった。科学者や技術者はしばしば、ほとんど神学的訓練を受けていないまま、主流の神学で実践されていた聖書理解の仕方とは異なって、聖書の文章を地球の年齢や生物学的多様性の起源についての科学的情報源として用い始めた。一つの結果として、今日、科学と技術において世界でも指導的な国の一つである米国で、人口の約半数が創世記の解釈においてこの後者の近代主義的立場を取っており、その結果予想されるように、科学界との論争もある。皮肉なことに、反宗教的科学家の中には、創世記の解釈について創造説論者の近代的立場をとる者もある。

本論では、この不毛な論争のどちらの側も、ヘブライ聖書の物語の扱いを間違った視点から行っており、アウグスティヌスや初代キリスト教父たちの時代からすでにしっかり確立していた聖書解釈の標準的な方法を使っていないことを論じる。議論を分かりやすく例証するため、本論は創世記の1-11章に焦点を当てることにする。

創世記 1-11章 概論

創世記1-11章は、聖書の序論であり、聖書の残りの部分で出てくるテーマを導入し、後に取り上げられる様々な物語を語っている。しばしば、十分に理解されていないことだが、それらの物語は注意深く結び付けられ、「罪の増し加わったところには、恵みはなおいっそう満ちあふれた」[訳注：ロマ書5：20]という言葉に要約されるパターンを確立している。アダムとエバの不服従の結果、罪は広がる。暴力が広がる。カインはアベルを殺し、レメクは彼を打った男を殺す。そうして、そのように続き、ついに、「この地は神の前に墮落し、不法に満



著者紹介

アーネスト・ルーカス博士（牧師）は、プリストルバプティスト大学（プリストル大学の提携校）の副学長及びチューター。ルーカス博士は米国ノースカロライナ大学とオックスフォード大学で生物化学のポスト・ドクター研究を行なった後、オックスフォード大学で神学を学びリバプール大学で東洋学の博士号を取得している。近年の著書には『今日われわれは創世記を信じられるか』（Can we believe Genesis today?）(IVP, 2005)がある。

ちていた」（創世記6:11）と語られるほどになる。神と人間の境を取り除きたいとの願望は、アダムとエバが禁断の木の実を食べる原因となったものであるが、他の点にも表れている。たとえば、「神の子ら」と「人間の娘たち」の境を越えた結婚（創世記6:1-4）や、天まで届く塔を建てようとする試み（創世記11：4）などである。神はその罪に罰で答える。すなわち、アダムとエバは樂園を追われる。カインは耕作の出来る土地から追われる。洪水が送られ地を一扫する。バベルの塔を建てている者たちの言語が乱され、彼らは散らされる。けれども、どの罪の行為も恩寵のみ業を受けるのである。神は、アダムとエバに衣服を着せる。カインは命を守るしるしをつけられる。ノアとその家族と動物たちのつがいは洪水から救われる。

バベルの塔の後の恩寵はどこにあるのだろうか？ それがないことが、創世記1-11章の序論的性質を示している。これらの章はこれだけでは未完成であり、何か他のものの準備となっているのである。セムの系譜（創世記11:10-32）は重要であり、バベルの物語をアブラハムの召命とアブラハムへの約束とに結び付けている。欠けていた恩寵のみ業はここにあるのだ。創世記12章1-3節にある約束は、創世記1章26-28節で言われていたことと並行関係にある。

創世記1：26-28

産めよ、増えよ、
地に満ちよ。
神は御自分にかたどって
人を創造された。

創世記12:1-3

私はあなたを大いなる
国民にする。
私が示す地に行きなさい
私はあなたを祝福し、
あなたの名を高める

神の召しは狭められているように見える一創造のときの神の意図は、今では一人の人とその子孫に向けられている。しかし、神の約束は、それが「地上の氏族すべて」のための神の目的の一部だということを示している。神の救済の計画の成就の物語は、アブラハムの召命で始まる。そして、それは、創世記1-11章抜きでは十分には理解できないことである。

創世記11章の解釈

創世記1-11章が「科学と聖書」についての議論の焦点となるときには、これらの章の神学的目的は普通無視される。無神論の科学者と原理主義キリスト教徒の両方もが、単純に、これらの章を21世紀の科学の概念と並べて読んでしかるべきものと考えている。それは、いかなるテキストを理解しようとする際にも当てはめられるべき基本的な考察を無視していることである。それらは、以下のような問いである。

- どのような種類の言語が用いられているか。
- それはどのような種類の文学であるか。
- 期待されている聴衆はどのような人々か。
- そのテキストの目的は何か？
- いかなるテキスト外知識が関連しているか？

これらの問いはどのようなテキストを理解しようとするにもふさわしいものであるが、聖書については特にふさわしいものである。聖書の神の教義と密着しているからである。最初の3つの問いは聖書の神がナザレのイエスに受肉した神であるという事実に関係している。キリスト教徒たちは、神がある特別の時に特別の文化の中で生きたある特別の人物に最も十全に啓示されていると主張する。これは、ヘブル語聖書に記録された神の自己啓示の頂点であった。ヘブル語聖書には神の言葉が、ある特別の民族の言葉に身を包み、ある特別の国民の歴史と文化に根付いた特別の言語と特別の文学形式を用いてわれわれに示されているのだ。それゆえ、われわれが聖書で読むすべてのことに関して最初の3つの問いを問う必要があるのだ。

21世紀の聖書解釈の一つの問題は、人々が自分が読む言語の種類について先入観を持つようになってきていることである。

今日の多くの文学者は第4の問いを問題視している。なぜなら、彼らは「著者の意図」という概念を拒否するからだ。けれども私は、これが実際妥当な問いであると論じる学者たちに同意する。この問いは文学ジャンルやテキストの構成や言語の種類などが鍵となり答えが見出される¹問いだと考えるからである。聖書の神は創造の神でありまた啓示の神である。さらに、人間は神に似せて神の像に造られているので、想像された秩序の中に見出される真理を理解することができる。この信念は、中世後期のヨーロッパで近代科学の創設者となった人々にとって重要なものであった²。その光に照らして、われ

¹ Lucas, E.C. 'A statue, a fiery furnace and a dismal swamp: a reflection on some issues in biblical hermeneutics', *Evangelical Quarterly*, (2005), 77(4), 291-307.

² Lucas, E.C. 'A Biblical Basis for the Scientific Enterprise' in Alexander, D. R. (ed.)

Can we be sure about anything? Leicester: IVP (2005), pp. 49-68.

われは、被造界の秩序を研究することで学べることはわれわれが聖書を通じて学ぶことと何らかの形で関連しているだろうと考えるのである。

この点でわれわれは、聖書理解に科学的知識を用いることについてドナルド・マッケイ教授が言ったようなこと³に耳を傾けてよいだろう。

明らかに、多くの聖書個所の表の意味は考古学的発見に基づいて吟味することが出来るし、科学的・歴史的歴史によって豊かな意味を加えられる個所もある。しかし、そのような分野の科学の第一の機能は靈感を受けた描写の正しさを立証したり、それに付け加えたりすることではなく、不適切な読み方を排除することにあると、私は示唆したい。比喻を理解しようとするときには、神がわれわれに与える科学的データはしばしばわれわれが描写に近く立ちすぎている時や、誤った視点から読んでいる時や、誤った先入観を持っている時に、われわれに警告し、神が意図した靈感を受けたパターンをわれわれに伝えてくれる。ローマ・カトリック教会は、このことに気づかなかったために、17世紀、コペルニクスの太陽中心の宇宙論を弾劾し、以下のような一連の聖書テキストに関する伝統的な解釈を訂正することをしなかった。

まことに、主は世界を堅く据え、世界は動かされることがない。(詩編93:1)

「世界は堅く据えられ、動かされることがない」(詩編96:10)

いかなる種類の言語か？

21世紀の聖書解釈の一つの問題は、人々が自分が読む言語の種類について先入観を持つようになってきていることである。ヴァン・ティルは、このように指摘している⁴。

21世紀の西洋文化は私には、比喻や象徴による文学を理解したり用いたりするのが下手なように感じられる。われわれはあまりにも、直截で実際の描写を用いた散文に慣れているので、ほとんどすべての文章がそのような形式であるように思いなしてしまう。...科学的文章は不当にも芸術的文学に優位性を主張している。

初期のキリスト教学者はこのような偏見をもたなかった。彼らは

創世記1-11章を文学的テキストとして読み、いかなる種類の言語が用いられているか、テキスト中に鍵を探した。5世紀の初期に、ヒッポの聖アウグスティヌスは、「おそらく、聖書の慣例的な形式は、限界ある人間の言語で、限界のある理解力の人間たちに向かって語っているものなのだ。」⁵ 創世記1に関しては、アウグスティヌスは、「靈感を受けた著者の語りは、子どものレベルの理解力の人にも理解できるようにかみ砕いて表している」⁶ ジャン・カルヴァン⁷は、神が語り方を語る相手に「合わせて調節する」という認識を発展させている。創世記1:6-8を論じて彼はこう言っている。

³ MacKay, D.M. *The Open Mind*, Leicester: IVP (1988), pp. 151-152.

⁴ Van Till, H.J. *The Fourth Day*, Grand Rapids: Eerdmans (1986), p. 11.

⁵ St Augustine *De Genesi ad litteram*, 1.14.28. English translation by Taylor, J.H. *St Augustine: The Literal Meaning of Genesis*, New York: Newman Press (1982).

⁶ *ibid.*, 2.6.13.

⁷ Calvin, J.A. *A Commentary on Genesis*, King, J. (trans.), London: Banner of Truth (1967).

なぜなら、私が考えるに、確かな原則として、ここで扱われているのは世界の見える形に他ならない。天文学やその他の深遠な学問を学ぼうとする者は、他のところに行くがよい。ここでは、神の霊が例外なくすべての人間に教え、それゆえ...創世記は...学問のない人々の書なのである。

物質界を語るとき、聖書は人々が見るとおりに、「外見の言語」を用いて描写している。それゆえ、カルヴァンは問題もなく「神は二つの偉大な光をお造りになった」（創世記1:16, ESV）と書くことが出来た。彼は、もし文字通りにとれば、これは科学的に不正確であるということを受け入れていた。土星が月よりも大きいことは天文学者が説得力をもって証明していたからである。またこれが科学的に不正確であるという理由として、月が単に光を反射しているだけにもかかわらず、自分で光を放つ太陽のような星であるかのように語っていることも言える。もし、科学的な真実に近い描写をしたいのであれば、この一節は「神は一つの偉大な光と一つの偉大な鏡をお造りになった」と言うべきである！

いかなる種類の文学であるか？

これもまた、テキストそのものの中に手がかりを探すことによってしか答えられない問いである。3世紀の初期にオリゲネス⁸は、創世記 1-3 章は比喩文学であると示唆している。以後何世紀にもわたって、多くの学者が、創世記 1:1~2:4 は、神を入念に計画された一週間の仕事をする働き手にたとえた長い「比喩的言説」であると結論している。地球は最初「地は形がなく、何もなかった」と描写される状態で造られた。最初の3日間で、神はそれを分離の行為によって形作り、何もない空間を創り出した。第2の3日間で、神はその空間を埋めるものを創り出した。第4の日の行為は第1の日に創られた空間に、第5の日の行為は第2の日に創られた空間に、第5の日の行為は第3の日に創られた空間に呼応している。

それぞれの日の最後に、神は自分の仕事を見渡して、「善し」とされた。第6の日、神は自分が創造したものを「非常に善い」と見た。神は7日目に休んだ。これは、創造を歴史的科学的に語ったものではなく、われわれは、ここから21世紀の科学的問いへの答えを得ることは出来ない。これは、神学的に次のような真理を主張する語りなのである⁹

- ・一人の創造主である神が存在し、彼自身とは別に存在するすべてのものを造った。
- ・われわれがここにいるのは、計画と目的を持った創造の結果である。
- ・物質的造物物は「善い」
- ・人間は被造物で特別な場所をもっている。26節の熟慮、27節に3回繰り返される動詞「創る」、そして神の「像」に創られたことは、すべてこのことを示している。
- ・人間は被造物界を大切に、育てる責任がある。
- ・7日目が祝福され聖別されていることは、人間が神を賛美するように意図されていることを示している。

人間が支配権を与えられ地を従わせるように命じられるのは、

人間が神の像に造られたからである。

環境学者の中には、「地を従わせよ」「すべての生き物を支配せよ」（創世記1:28）は、自然に対する侵略的、搾取的な態度を助長する強い言葉であると論じる者もある。これは、創世記1章のいかなる健全な解釈によっても正当化されない。言語の意味はその文脈に強く左右されるということは、意味論の基本的規則である。「従わせる」と「支配する」に当たるヘブライ語の単語は、それ自体、侵略的行為にも搾取的行為にも言及しない。これらの語がそうした行為を表すときには、その意味を明らかにするのは文脈である。創世記1章の文脈は非常に異なる種類の行為を示唆している。人間が支配権を与えられ地を従わせるように命じられるのは、人間が神の像に造られたからである。このことが含む意味は、われわれは創造主の性質を反映するやり方で、知恵と愛と正義をもって、この命令を実行すべきであるということである。さらに、われわれが支配権を持つのは、神の代理としてにすぎない。われわれはこの支配権をいかに行使するかについて神に対して責任を負わなければならない。われわれはこれを受け入れて、神が被造物界を「とても善い」（31節）と評価したことを尊重しなければならない。われわれはわれわれが行なうことで、その「善さ」を傷つけたり壊したりするのではなく、保存し、発展させなければならない。

カルヴァンの注釈⁹は「緑の神学」が何も新しくなく、聖書の創造物語からごく自然に導き出せるものだということを示す。

地が人間に与えられたのは、地を耕さねばないとの条件付きだった...樂園の監督の役目はアダムに与えられたが、それは、われわれが神に託されたものを手にしているのは、つつましく度を越さぬ使い方をして残りを大切にするという条件でなのである。...皆、自分の持ち物について自分を神の管財人と考えよう。そうすれば、放埒な振る舞いをしたり、神が保存しなさいと求めているものを濫用して損なってしまったりすることもないだろう。

いかなる種類の聞き手か？

創世記1-11章は、イスラエルの神を礼拝する古代ヘブライ人のために書かれた。学者たちはテキストの執筆年代について意見をたがえている。正確な年代はわれわれの目的には重要なことではない。なぜならば、もし、以下で論じるように古代中東に広まっていた創造の思想と関連して見るとしたら、その思想の基本的な性質は出エジプトと捕囚からの帰還の間あまり変わらなかったからである¹⁰。

これが最初の聞き手だとしたら、われわれは少なくとも最初はわれわれ21世紀の人間の目ではなく、彼らの目を通してテキストを読むべきである。その結果、異なってくることは、例えば、系図の理解の仕方がある。「若い地球の創造説」を信じる人々は、そこに書かれている年代を文字通りにとり、地球はほんの2~3千年前に出来たといわざるを得なくなっている。しかし、これが、古代のへ

⁸ 本論冒頭の引用参照。

⁹ Calvin, *op. cit.* [9], commenting on Gen. 2:15. (約450年前の著書である)。

¹⁰ Dalley, *S. Myths from Mesopotamia*, Oxford: OUP (1991), pp. 228-230.

ブライ人が聖書に書かれている年代を読んだ読み方であろうか？ヘブライ聖書【^{訳注}キリスト教で言う旧約聖書のこと】の年代は、5の倍数で時にそれに7か14を足したものである。これは、ほとんど偶然ではありえず、これらの数字は今日のわれわれには明らかではない何かの象徴であることを示しているのかもしれない。

創世記1-11章は、BC3000-2300年頃から南バビロニアに存在していた古代シュメール文明¹¹の「王名表」と顕著な対応関係がある。

シュメール王表	創世記1:11章
王制が創られた	人々が創られた
8か10人の王がそれぞれ	10人の族長がそれぞれ
43000-18600年間統治する	969-365年間生きる。
洪水	洪水
更なる王が、それぞれ	更なる族長が、それぞれ
1500-100年統治する	600-110年生きる

全体の型は同じである。後期シュメール王の一人、エンメバラゲシは、900年統治したと言われている。他の証拠は彼が通常の期間統治した実在の人物であったことを示している¹²。明らかに、900年というのは何か象徴的な意味を持っている。統治期間や寿命が短くなってゆくことは何か、人間たちに何らかの質の悪化が起こっていることを反映する意味でこう書かれたのだろう。創世記では、霊的・道徳的悪化としての「罪の広がり」の主題が、このように提示されている。

このテキストの目的は何か？

古代近東の諸宗教についてのわれわれの知識が増すにしたがって、聖書学者たちは創造物語を神学的論争の産物と見るようになった¹³。聖書の創世記はヘブライ人たちが住んでいた地方の諸宗教に広まっていた思想に対峙してヘブライ人の創造理解を表している。

古代世界に広まっていた多神教に気づいている現代の読者にとって、このことの一つの明らかな例は、この物語の一神教信仰である。古代近東の他の物語は「神統記」つまり、神々の系譜で始まる。次に、その神々のひとりがすでに存在している何らかの「材料」を用いて宇宙を造りだす。ヘブライの物語では、神はひとりしか存在しない。これは「宇宙起源論」、宇宙の起源の物語である。神の存在は当然のこととして前提とされている。

他の例は、古代近東に広まっていた概念に慣れていない読者にはそれほど明らかではない。太陽や月はなぜ単に「光」と言われているのか？ 注意深い読者たちはこのことを不思議に思うべきである。なぜなら、ヘブライ語には太陽や月を表す申し分のない善い言葉があるからである。その答えは、セム語では「太陽」や「月」を表す単語は、神々の名でもある、ということだ。ヘブライ人の周囲の民族は天体を崇拝していた。ヘブライ人も、その例に倣うように誘惑されていた¹⁴。創世記1:14-19は、そのような崇拝すべてに対する攻撃である。天体は単に

イスラエルの神に創造された「光」（大きな灯油ランプにたとえられている）に過ぎない。さらに、人間はこれらの神々に仕えるために存在しているのではなく、むしろ、「光」のほうが、光源としてまた暦の刻み手として、人間に仕えるのである。天文学ではなく近代占星学に通じた考え方は、少なくとも2500年昔にヘブライの神学者たちにすでにその正体を暴かれていたのである！

ヘブライ語の動詞 *bara*（「創造する」の意）が創世記の物語で用いられている仕方は意味深い。ヘブライ聖書では、この動詞は、能動態では神の創造の業にしか用いられておらず、創世記1章の3箇所¹⁵にしか表れない。他の箇所では神は事物を「作る」と言われるが、その動詞は人間の様々な「作る」行為にも用いられている。神の創造の業の計画的陳述である1章1節で *bara* が用いられているのは、理解できる。また、創造の最終的行為である人間の創造（27節）に3回用いられていることも理解できる。しかしなぜこの語が21節の海獣の創造に用いられているのだろうか？ 説得力のある唯一の答えは、メソポタミアの創造物語における海獣の重要性にかかわるものである¹⁵。ここでは、創造神は天と地を創造する前に荒れ狂う水の中の海獣として描かれる混沌の力と戦い、その力を鎮めなければならない¹⁶。創世記はこれを否定して、海獣は単にイスラエルの神に創造された世界の一部に過ぎないと強調している。イスラエルの神は海獣と戦う必要はない。彼が海獣たちを創ったのだから。

メソポタミアの創造物語では人間たちは神の血を混ぜた土で作られる。これは、ヘブライ聖書でアダムが「地の塵」と神の命の息で作られているのとよく似ているが、メソポタミアの物語では人間たちは単に神の奴隷に過ぎず、神が働かなくてよいために創られるのであり、彼らは神々のために家（神殿）を建てたり、神々に食べ物や飲み物を（犠牲）供したりしなければならない。すでに見たように、人間の重要さは創世記1章で様々に強調されている。人間たちは神の奴隷としてではなく神の地上での代理人として創造され、他の被造物に対して責任を持つ。本論では、人間が神の「像」と「似姿」として創られたということの意味を掘り下げる余裕はないが、おそらく人間の権利についての西洋の概念がこの陳述に根ざすことは間違いないであろう¹⁷。確かに、人間の特殊性と尊厳についてのこの根拠を失って、哲学者や倫理学者は「霊長類の権利」とか、単に「感覚を持つ生物の権利」までも含む¹⁸ように理解しようとする圧力に抗してこの人権の概念を維持しようと苦闘している。

メソポタミアの宗教における一つの主たる問題は、なぜ人間は知恵や不死性を持っていないかということである。（これは、創世記3章の知恵の木や命の木に反映している）。『ギルガメシュ叙事詩』¹⁹では、ギルガメシュが不死を探し求めてまわる。彼は、「命の草」を見出すが、彼が家に戻る旅路で蛇に奪われてしまう（これも、創世記3章に反映している）。この物語と創世記3章の物語の大き

¹⁵ Heidel, A. *The Babylonian Genesis*, Chicago: University of Chicago Press (1969).

¹⁶ ヨブ9:13-14; 26:12-13; 詩編 89:9-12; イザヤ27:1; 51:9-10 は、ヘブライの詩人はこの物語を何らかの形で知っており、そのイメージを用いてヤハウェが創造主であることを表したのだということを示している。

¹⁷ Stassen, G. 'Human Rights and the Helsinki Accords Are Our Baptist Heritage', in Pipkin, H.W. (ed.), *Seek Peace and Pursue It*, Rüschnikon: Institute for Baptist and Anabaptist Studies (1989), pp. 103-113.

¹⁸ Peter Singerの見解についての議論に関しては Alexander, D. *Rebuilding the Matrix*, Oxford: Lion (2001), pp. 462-472 を参照。

¹⁹ Heidel, A. *The Gilgamesh Epic and Old Testament Parallels*, Chicago: University of Chicago Press (1970).

¹¹ Jacobsen, T. *The Sumerian King List*, Chicago: University of Chicago Press (1939).

¹² Kitchen, K.A. *Ancient Orient and Old Testament*, London: Tyndale Press (1966), p. 40.

¹³ たとえば Hasel, G. 'The Polemic Nature of the Genesis Cosmology', *Evangelical Quarterly*, (1974) 46, 81-102 を参照。

¹⁴ 申命記4:19; 17:2ffには、「太陽、月、星といった天の万象」を礼拝してはならないとの禁止命令が記されている。

な違いは、これには何も道徳的な要素がないことである。創世記3章では人間の傲慢さ、「神のように」なりたいたいという願望が、創造主の命令に対する反抗につながり、死をもたらす。罪に帰されるのは**人間としての死**だけであり、肉体的死以上のことが暗示されている。

神は「その実を食べればあなたは必ず死んでしまう」と言ったが、アダムとエバは果実を食べたとたんに肉体的に死んだわけではない。起こったことは、肉体と精神の両方の源である彼らの創造主との関係が壊れてしまったことだった。「精神的な死」が第一の罰だったように見える。もし、創世記2-3が古代中東のモチーフを用いた象徴的な物語だとしたら、そこから人間の起源について科学的情報を得ようとするのは不適切である。それは特に、人間存在の聖書的「定義」が、神の「似姿」だからである。これは、精神的質²⁰であり、科学はホモ・サピエンスを物理的面でしか定義できない。

メソポタミアの洪水物語の数々は聖書の物語と顕著な類似を示す²¹。それらはどれも古代近東の大洪水に関する物語である。カルヴァン²²は、エデンの園の所在地について与えられた詳細は、古代近東の地理に大きな変化を起こさなかったとコメントしている。洪水が全世界を覆ったとの印象は、主にヘブライ語の'eretsが通常「土地land」（限定された地域を意味する）と訳せるときに、通常「地earth」と訳される（これは地球earthを表すととられる）からである。ここでも、顕著な違いはメソポタミアの物語に**道徳的性質がないこと**である。主神は洪水を送るのだが、それは、彼の眠りを妨げるうるさい人間が地に増えすぎたからである。聖書では洪水は人間の罪深さに対する道徳的罰であり、神がどれほど罪を真剣に受け取るか、そしてなぜ人間は救済を必要としているかが示されている。

結論

創世記1-11章は神学的テキストであり、科学的知識を掘り出すのではなく、神学的テキストとして読むならば、この物語が古代ヘブライ人に意味を持っていたように21世紀にも意味を持つことがわかる。その間の何世代ものユダヤ人やキリスト教徒にも意味を持っていたのと同じようにである。21世紀へのこの物語のメッセージは以下のような点を含む。

- ・唯一の神が存在し、それは、それ以外に存在するすべてのものの創造主であり、礼拝されるべきはこの神だけである。これは占星術によって意味を求めたり、「母なる大地」を礼拝したりする「ニューエイジ」の霊性に対立する。
- ・地球という惑星では、人間だけが神の似姿に創られている。これは「人間の権利」の基礎である。
- ・人間は、地上での神の代理人として神の他の被造物を大切にし、その「善さ」を保存し発展させなければならず、濫用してはならない。
- ・われわれが計画によって作られた秩序のある被造界に生きており、神の似姿につくられているという事実は、科学的営みの基となる。
- ・われわれは罪深く、罪は神の善き創造を損なってきた。われわれはそれゆえ救済と回復を必要とし、それを神が、長く待望されたエバの「子孫」²³であるイエスによって与えてくれたのである。

²⁰ 「神は霊である」(ヨハネ 4:24)。

²¹ Heidel, *op. cit.* [21], pp. 224-269.

²² Calvin, *op. cit.* [9], 創世記2:10-14の注釈。

²³ 創世記 3:15.

「ファラデー論集」 (The Faraday Paper)

「ファラデー論集」はファラデー科学・宗教研究所 (Faraday Institute for Science and Religion) を出版者とする。当研究所は St Edmund's College, Cambridge, CB3 0BN, UK に本部を置く教育と研究のための慈善団体(www.faraday-institute.org)である。また、本論文集の日本語訳は本多峰子による。「ファラデー論集」に表明された意見は各著者の意見であり、必ずしも本研究所の意見を代弁しているとは限らない。「ファラデー論集」は、科学と宗教の相互作用に関する幅広い論題に取り組んでいる。現在出版されている「ファラデー論集」のリストは www.faraday-institute.org で閲覧可能であり、そこから、PDF ファイルでダウンロード出来る。

出版：2014年3月© The Faraday Institute for Science and Religion